2015年6月号（第350号）昭和61年7月8日　第三種郵便物認可　平成27年5月1日発行　毎月1回1日発行

住宅特集

創刊30周年

新建築
350
6
2015
SHINKENCHIKU
JUTAKUTOKUSHU

特集／小さな家

現代における小さいことの意味

作品／十六題
ヴィール・アレッツ
長尾亜子＋今村水紀＋篠原勲
山下保博
針谷將史＋釜泡誠司
堀部安嗣
村山徹＋加藤亜矢子　二題
中村拓志
安藤邦廣　二題
難波和彦
納谷学＋納谷新
岸本和彦
小泉誠
川口通正
浅利幸男

連載
家をつくる図面

MAKE ALTERNATIVE TOWN——若手建築家5名による倉庫リノベーションの提案

2015年4月16日〜22日
建築会館ギャラリー（東京都港区）　http://www.makealternativetown.com/

東京国際空港と東京駅との中間に位置する芝浦地区は、山手線の新駅、リニア中央新幹線のターミナル駅の計画地であり、2020年東京オリンピックのベイ・ゾーンにほど近い。歴史的には東京の中心的な港湾地区として、戦前には軍事施設、戦後には交通インフラが整備され、商工業施設が多く建てられてきた。近年では工場跡地の再開発により高層マンションを中心とした居住エリアが生まれている。本展覧会では、この地区を構成する要素である倉庫に注目し、既存の都市構造を活用しながら、住民の新たな活動を生み出すウォーターフロントの姿が提案された。

フォーラムでは、この地区にある芝浦工業大学で教鞭をとる西沢大良氏により、街の歴史や特性が説明された。西沢氏は「居住エリアとオフィスエリアが混在し、街を歩くと街区ごとにサービスの種類の変化が感じられる芝浦地区だからこそ、街のユニークな点となり得る」と、点在する倉庫の可能性を示唆する。また空き倉庫のリノベーション企画やコーディネートを手掛けるリソーコ代表の池田浩大氏からは、空き倉庫が10年前の10倍に増加している現状、リソーコが手掛けたリノベーションによって新たに街に生じているネットワークなどについて語られた。

若手建築家5名（畝森泰行氏、久保秀朗氏、中川エリカ氏、中村真広氏、松井亮氏）による提案は、水辺、交通インフラといった周辺環境、大断面や躯体など倉庫の建築物としての特性に着目しながら、人びとの新たな活動を仕掛けるもの。彼らは、約1年前にスタートした研究会での活動を通し、街を歩き、それぞれの視点で設計対象となる倉庫の魅力を見い出した。

モデレーターを務める中崎隆司氏は、オリンピックに向けてより変化する芝浦エリアだからこそできる展開を考えたいと語った。建築家と企業が協働し、街の構造と人の活動がさまざまなかたちで結びついた都市風景が生まれる幕開けを感じさせる展覧会であった。

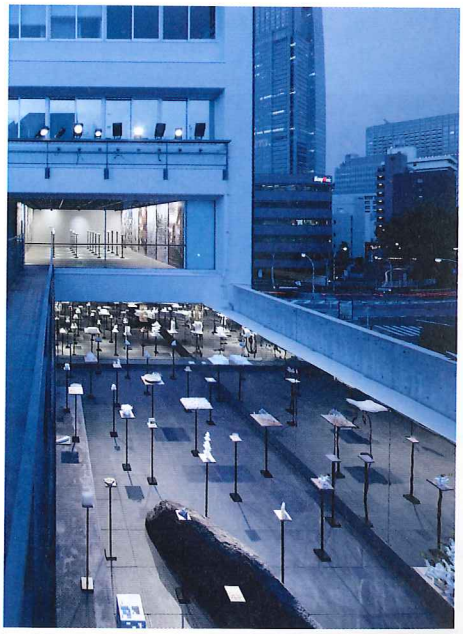
写真4点撮影：上田宏

上：芝浦地区全域の模型。会場構成は西沢氏が担当。中：松井氏は、躯体に外階段を付加し、移動が容易な設えを備える工房を提案（写真手前）。下左：畝森氏は公共スペースの少なさに着目し、水辺の既存倉庫の一部スキップフロアとした親水性のある図書館を提案（左手前）。中村氏の提案は、倉庫の断面構成に着目し、ドローンを楽しむスペースをつくるもの（右奥）。右下：久保氏による提案は交通インフラ沿いに建つ倉庫をショールーム化するもの（手前）。中川氏は倉庫の屋上の開放性に着目し、工作物により身体と都市風景を繋げることを提案。

藤本壮介展　未来の未来

開催中　2015年6月13日まで
TOTOギャラリー・間（東京都港区）　http://www.toto.co.jp/gallerma/

「House N」や「Tokyo Apartment」、「武蔵野美術大学美術館・図書館」や「Serpentine Gallery Pavilion 2013」など、住宅から公共建築まで国内外で意欲的な建築をつくり続ける藤本壮介氏の個展が開催されている。展示のテーマは「未来の未来」。現在の社会がもつ潜在的な可能性をかたちにすることは、「未来の種」を蒔くようなものだと氏はいう。第1会場（3階）には、これまでに手がけた実作やアンビルドのプロジェクト、また現在進行するプロジェクトの模型が、素材や大きさもさまざまに100あまり展示されている。椅子や塔など、家具や建物としてすでに完成しているものを集積して新たに建築をつくり上げたコンセプト模型や、ブロックやプレート、線材など、ひとつの素材を緻密に組み上げて空間をつくり出すもの、また分子構造を思わせる、何かの断片のようなものが浮遊しながらネットワークされる構造体など、建築としての建ち現れ方や、それよりもっと手前の建築の成り立ちやその構成要素を問い直すように、さまざまなかたちで表現される。第2会場（4階）は「建築とは見いだされるものではないか」というコンセプトのもと、スポンジや灰皿、空き箱など見慣れたものに人型の模型を挿入することで、空間としてとらえる視点を提示する。数と共にバリエーションに富む模型からは、既成概念を軽やかに飛び越える藤本氏の思考の過程が見て取れ、来場者の読み取りを多様に広げてくれるだろう。



© Nacasa & Partners Inc.

右上：会場全景。2フロア内外に渡って100あまりの模型が展示される。　左下：3階会場は室内の長手壁面に貼られた鏡面の中にも、模型の群が増幅する。　中下：4階会場。日常目にするものに建築を見い出す試み。　右下：空き箱を空間に見立てている。